

幕間のメモランダム

長谷川
雄治

もう何度目か分からない手術を終えた彼は、ひとしきり暴れた後、ようやく眠りに就いた。元の身体なんて、もうパーセントも残っていないというのに、その寝顔は昔から見ていた面影を残している。

この顔を初めて見たのは、もう二十年以上前。私も何も知らない少女だった頃、女の子みたいに整った顔立ちの、可愛らしい年下の男の子だった。子ども園でも小中学校でも、学年が違えばそれ以上の接点はなく、落ちこぼれだった私は内部進学もできずに、外部の公立高校を受験した。

「外」に出てしまえば、もう二度と出会うこともない。そう思って二年も過ぎていると、三年生になる頃、新入生に彼の姿を見かけた時は心底驚いた。子どもらしい丸顔しか記憶になかったが、すっかり男らしい顔つきになったその顔に、私はビビッと胸を貫かれた。

この人が、私の運命の人かもしれない。

幼い頃に面識のある人と近い地域の高校でたまたま再会するなんて、きつと大した確率ではない。運命と決め付けるには頼りない確率だが、根暗の理系女子を爆進していた私には、数少ない運命の出会いだった。

出来ることなら、彼の初めての人になりたい。人付き合いが苦手で、友達と呼べるような人も少なく、異性とのやりとりなんてもつてのほか。ましてや、人気のある下級の男の子に声をかけるなんて、モブの私に出来るはずもない。

その後も結局、高校ではロマンスなんて一ミリも起こることなく、卒業してしまった。在学時にチャンスが何度かあったにも関わらず、言葉も大して交わせなかった。でも、彼がお父さんの後を継いで、ネフイリム計画に関わりたいた言うのはどこかで聞いた。私は全てを勉強にかけ、「街」との接点が多い命輝大学に現役で合格できた。

彼とは志望学部が異なったらしく、大学や大学院で一緒になることはなかったが、私が研究所へ就職したときは、後から彼も配属されてきた。一度は「街」を離れた二人が、同じ仕事を志望して、同じ職場で再会できた。

私の方から擦り寄って単なる偶然とは程遠いが、もう運命と信じてもいい。彼

のその後の恋愛遍歴は全く知らなかったが、私は必死に努力した。根暗でブスな見た目も性格も徹底的に治し、彼が惹かれそうなクールビューティーな先輩研究員の姿を作り上げた。

幼い頃からトレードマークだった赤いメガネは変えず、それが映えるように全てを整えた。これなら、彼は振り向いてくれるはず。一人で必死に願っていたら、再会した研修の場で、「高校以来ですね、遊川先輩」と彼の方から声をかけてくれた。

私は一人で、勝手に盛り上がっていた。その場は職場の先輩として、研修の先生役を何事もなかったように務め上げたが、心のドキドキを抑えるのに必死だった。何を言い、何を教えたのか、その日の記憶が全くない。

後にベッドで彼に直接尋ねたところ、「別に、普通だったよ」と彼はこともなげに言った。変なところはなかったか尋ねると、「ちよつと早口だったかな」と付け加えた。

必死にクールビューティーを気取っておきながら、私は二つも下の男の子相手に、舞い上がっていた。経験のなさはすぐにバレ、引く手数多の優秀な彼は、仕事もきつちりこなしながら、多くの女性研究者と逢瀬を重ねた。私もその中の一人。最も、私と彼とでは種族の垣根があつて、どれだけ頑張っても自然繁殖による子供は望めない。そこも、彼にとっては都合が良かったのかもしれない。

他の人ならいざ知らず、私は別に、それで良かった。彼に利用されるだけのメリットがあるなら、使い捨てられるまで「都合のいい女」で構わない。

そう心を決めていたのに、彼はいつの間にか「被験体」としてベッドに横たわっていた。ハチ公タワーのメンテナンス係として再就職していたお父さんが運転する車に乗り、ハチ公タワー近くの交差点で、別の車と衝突事故を起こした。一方は酒を飲んでおり、猛スピードでぶつかった二台の車は、いずれも原型を留めない凄まじい事故だった。

彼と同乗していた他のご家族、お母さんもお兄さんも亡くなられ、唯一の生存者である彼の延命措置として、彼が進めていたネフィルム計画、全身の機械化が施された。彼の四肢は、お父さんが身につけていた義肢が再利用されている。

元の美しい顔も、元のたくましい身体も、何一つ残っていない。全身に走る手術痕と、醜さを極めた機械だらけの顔、原型をほとんど留めない大改造手術だった。女たちが愛した姿や、彼自身はもうどこにもない。

ベッドの上で静かに仰臥している機械の彼を、ジッと見つめる。どこまで長生

きできるかも知れぬ経過観察。幸い、生体反応に異常はない。このまま行けば、彼は再び立ち上げられる。今度は、最良の実験動物として。

すっかり醜くなつた彼の監察官、世話係に、彼に群がっていた女たちは誰一人として手を挙げなかつた。彼と結婚間近だと噂されていた女性研究員は、彼が昏睡状態に陥っている間に、別の男性職員と結婚し、寿退社していた。

彼を独り占めできるチャンスなんて、一生巡つてこない。私は、それなりに評価されつつあつた研究を全て他の人に譲り、彼のお世話を買つて出た。同僚には元の研究を続けて欲しいと引き留められたが、私にはそれを振り切るだけの権限が与えられていた。

自分の処遇は自分で決める。それだけの地位と権限を、数々の実績で手中に納めていた。それもこれも、彼と同じ職場で肩を並べて働きたいと思つたから――。私は寝ている彼の頬を軽く撫で、その硬さと冷たさをじっくり味わつた。かすかに残る元の身体、皮膚の肌触りも確かめながら、醜くて可愛い寝顔を独り占めする。

彼のバイタルを入念にチェックしながら、私はデスクの端末に向かい合つた。今日に記録を日誌に記しながら、かつて彼と一緒に撮つた写真をモニターに表示する。数少ない休暇には、一緒に水族館に行つた。動物園にも行つた。映画を見て、話題のスイーツを食べ、冬には寒さに体を寄せ合いながら、各地のイルミネーションも見に行つた。

でも、今の彼とはこんな記録、思い出を作れない。機械だらけの身体になつたからではなく、ネフイリム計画の最高機密になつてしまつたから。最新の実験を施し続ける被検体でもある彼は、「街」の外には出られない。

モニターのブルーライトを浴びながらキーボードを叩いていると、ベッドの上で彼が目を覚ました。彼は周囲の配線を気にすることなく、肘をついて上体を起こそうとする。私は彼の背中に手を添えながら、生命維持とモニタリング用のケーブルが外れないように手伝つた。

「詩恵留、か」

彼は私の名前を呼び、「ありがとう」と言つた。私は鼓動が早まるのを感じながら、必死に平静を装い、「ごめんなさい。起こしちやつた？」と言つた。

「いや、問題ない」

「そう。良かった」

私はサイドテーブルで充電器に刺さつていたタブレットを取り、ペンを握つた。

「気分はどう？」

「体調って意味なら問題ない。精神的な面で言うなら、最悪だ」

彼は、答えに応じてタブレットを操作する私を見上げる。私は上手く視線をかわし、問診票の記入を続けたが、あまりにもジッと見つめられるものだから、折れてしまった。

「何？」

「いや、白衣の天使みたいだと思ってね」

彼は口の端を上げ、ニヤリと笑ってみせた。白衣は着ているが、あくまでも研究者としての白衣だ。

「ご所望なら、お着替えしましょうか？」

私はロッカーを開け、中にしまつてあつたナース服を、かけてあつたハンガーごと引っ張り出した。

「お、気が利いてるね。他にもあるの？」

彼はロッカーの中を覗き込むような素振りをする。私はケーブルが外れないかヒヤヒヤしながら、「大人しくなさい」と彼に注意した。

「いい子にしてたら、後でサービスしてあげる」

「部屋ごとモニタリングされてるんだろ。大丈夫か？」

彼は周りを見回しながら言った。私はタブレットを充電器に戻し、ペンを横に置いた。ケーブルをよけながら、彼の身体へしなだれ掛かる。

「フェイクも改竄も、私の手にかかれば一発よ」

彼は私の言葉に、「それもそうか」と鼻で笑った。

「それに、監視係に見せつけてやればいいのよ」

「それも一理あるな」

彼は私の発言に乗ってきた。が、現状のケーブルだらけではどうしようもない。一旦お預けを食らわせ、監視カメラの映像にフェイクを挟み込む。生命維持に必要な最低限のケーブルだけ残し、他のモニタリングは一旦停止させる。

これで共犯者は、盗撮、盗聴の担当者だけ。報告できるものなら、してみればいい。私は彼の身体に手を伸ばした。

彼女をきちんと認識したのは、高校一年の春。「街」から外に出て進学した先で、同じ中学校出身の先輩が生徒会にしていると聞いて、一度覗きに行った時だった。真つ赤なメガネと広いおでこの女の子は、随分昔に見たような気がしていた。

本人が目の前にいるときには思い出せず、帰宅後に親から教えてもらい、やつと当時の記憶を思い出した。「街」にいた時に通っていた子ども園で出会った二つ上のお姉さん。

小学校も中学校も同じ学校へ進学していたはずなのに、学年が二つも異なる異性だと、大した付き合いは生まれようもない。どうやらお互いに部活も真剣にやっていたらしく、ますます接点は増えそうになかった。

状況が一変したのは、私が中学へ進学する頃。ネフイリム計画に携わっていた父の身に起きた、研究中の事故だろう。アレがなければ今頃、私は「街」の中で生活し、「街」の中から出ることもなく、進学していたはず。

事故に巻き込まれた父は元の身体を失い、四肢と脳の一部を機械化することとなった。生体組織と機械を無理やり接合する一連の実験でも、ある程度安定性が認められていた技術が父の身体に組み込まれ、身体の欠損を補うとともに研究者の地位を剥奪されることになった。

父は「街」の研究機関、中枢から追いやられ、ハチ公タワーのメンテナンス要員という末端の仕事を任されることになった。頭を使う仕事から、身体を酷使する仕事に切り替えられ、慣れないだろうに苦言は一言も漏らさず、我々家族のために身を粉にして働いてくれた。

ただ、私や兄の生活は一変した。「街」の中枢から追い出された我々は、在籍中だった学校には継続して通えたものの、進学先は「街」の外を選ばざるを得なかった。再び「街」の中へ戻るには、大学や院へ進学し、「街」に有用な人物となるしかなかった。

私は、研究職という神にも等しい領域にいる父が誇らしかつた。高い志を持ち、科学のため、「街」のため、人のために役に立とうと目を輝かせている彼の姿が好きだった。母や兄は、事故後に汗水垂らして働く父も素晴らしいと称賛してい

たが、私には理解も納得もできなかった。

神と等しい地位から、下僕にも等しい地位へ墮とされた父に、もはや尊敬の念は抱けなかったし、興味も持てなかった。私が人生を捧げるなら、彼が輝いていた時の仕事しかない。臍げながらそう心に決め、中学、高校と脇目も振らず、勉強へ打ち込むことにした。

高校へ入学してからは、男女共学の普通科ということもあり、年相応の不純異性交遊、愛だの恋だのの真似事もした。「街」の外へ出てから気がついたが、見た目もそんなに悪い方ではないらしく、寄つて来る女は年上も年下も関係なく、途切れなかった。

ただ、どんな女も私の渴きを満たすことはできなかった。どれだけ交わつても満たされることはなく、どこかに虚しさを感じていた。私はその答えを求め、文学や演劇にも手を伸ばした。人や心を分つたフリをすれば、そのうち満たされる日が来るかもしれない、と。

だが、それは大きな間違いだった。読んでも読んでも答えは見つからず、演じても鑑賞しても、上手くなるのは表層のマネばかり。どこまで行っても心は満たせず、惚れた腫れたの修羅場をどう凌ぐか、女を取替え引替えする時はどう振る舞えば面倒臭くないのか、それらしい見せ方、嘘のつき方だけが上達して行った。

同級生とのそれらしい付き合いも難なくこなし、高校、大学を卒業して研究員として「街」へ戻ると、配属された先には彼女がいた。高校で一瞬だけ顔を合わせた、詩恵留先輩。当時はひどいルックスだったが、相当な努力を積み重ねたのだろう。知的な美人研究員へと成長していた。

見た目だけでなく、研究者としての実力も申し分なく、研究分野が少し異なるために、お互いがお互いを補い合ういい関係で、仕事を進めることが出来た。彼女の力を借りれば、父の進めていた研究をより一層前進させられるかもしれない。私は淡い期待を抱きながら、時々彼女を食事に誘った。彼女も私のことを悪いとは思っていないらしく、他に肌を重ねる人がいるのも知つていながら、食事後のベッドも何度か共にした。

幸か不幸か、彼女と私とは種族の壁が立ちほだかり、どれだけ交わつても子を成す可能性はない。女にとつては不幸だろうが、私にとつてはそれも幸いした。年末を控えたある日のディナーで、私があけすけに本心を明かすと、彼女はそれら全てを知つていて、それでもいいと答えた。「都合のいい女」で構わないか

ら、嫌わないうでくれ、と。

私の何が良くて、彼女がそんな献身的なのか理解が追いつかなかった。ただ、彼女がそうしたいというのなら、そうするだけの価値が私にはあるのだろう。彼女が私を信仰するのなら、私が神と等しい存在になればいい。

私は気合を入れて、父が追い出された研究に手をつけた。安全性が確認された機種、機材を接続するのではなく、もっと大胆で大規模な実験をしなければ、到底神には近づけない。

私は詩恵留の力も借りながら、どんどん危ない領域へ踏み込んで行った。周りの分からず屋な同僚は無視して、私の高邁な理想、崇高な精神を理解してくれる連中だけを相手に、研究に没頭した。

寝食も忘れて研究に取り組んでいると、いつの間にか所属部門のトップに立っていた。昇進などしても神に近づける訳でもないのに、今まで反対していた同僚も、一緒に力を尽くしてくれていた詩恵留も、とても喜んでくれた。

これは非常に喜ばしいことらしい。昇進してトップに立つたばかりの私に、部下たちは休暇を取るように勧めてくれた。永らく研究室に籠りっぱなしだったし、実家の父や母、兄にもしばらく会っていない。

昇進の報告もするべく休みを取り、実家に戻った。止せば良いのに、無理やり外に出てそこそこ高いレストランでお祝いをした。晴れやかな気分のまま、久しぶりに父の仕事場近くを周って帰っている最中、私の身体は強い衝撃を受け、急に意識を失った。

次に目を覚ますと、私は研究者から実験動物に降格されていた。自らの残した研究で、自らが求めていた被験体となって、全身の機械化を施されていた。

義肢や機材の一部は、父が使用していたものの流用だと言う。それらを使用していた父は、車に同乗していた母や兄と共に亡くなっていた。

私は再び、全てを失った。父の身に起きた事故も、今回巻き込まれた自動車事故も、全ては詩恵留と同じ、キカイの仕業。私はベッドの側に立つ看護師役の詩恵留に密かに腹を立てながら、献身的に世話をしてくれる彼女に、前より深い愛情も抱いていた。

詩恵留は科学や技術の最先端を追い求める研究からは身を引き、私の世話や保護、リハビリに付き合ってくれた。彼女が愛した声も顔も身体もないと言うのに、こんな醜い姿になっただけから、以前と変わらぬ愛を注いでくれている。

私は、ベッドの側で私の身体に触れている詩恵留に、仰臥したまま話しかけた。

「詩恵留は何故そんなに、私に尽くしてくれるんだ？」

彼女は微笑みを浮かべ、「理由が必要？」と言った。

「アナタは私の全てだから」

「こんな姿でも、か？」

彼女は再び笑って頷いた。

優秀な彼女を、こんなことに付き合わせてはいけない。彼女にはもつと、やるべきことがあるはずだ。私はベッドの中で身体を休めながら、来る日も来る日も頭を捻った。彼女と自分がこれから何をすべきか。そのために必要な計画、準備は何なのか。

ベッドの上で身体を起こすことが苦にならなくなった頃、私は詩恵留にノートとペンを要求した。彼女は私に言われるがまま、サイドテーブルにノートとペンを持ってきた。

私はベッドの中で延々と考えていたことを、監視カメラに映らないよう書き出した。途中で誰かに回収されても、真意が分からないよう気をつけながら。細心の注意と入念な暗号化を駆使して、自分の思考実験をどんどんノートにまとめていく。

全てを失った私にも、生きる希望はココに残っている。私はそう信じ、ノートにペンを走らせた。

初出 令和四年二月七日 noteにて公開

彼にノートを差し入れて数日すると、「外で話ができないか」との打診が来た。「街」から外へ出たところで、至る所に情報漏洩、監視の糸口はある。どこで何を打ち合わせしても無駄だと思いつつ、別の男性職員のBとダミーの梱包材を調達して、なんとか二人で外に出た。

無駄なのは重々承知の上で、別人名義で予約したシティホテルへ、二人で入った。どうしても目立つ彼の姿を誤魔化すために、外向けの認識阻害機能も有効にしておいた。どうせならもっと広い場所、明るい場所での逢瀬、デートを楽しみたかったが、重大機密の一つと化した彼を連れ出すなら、これでも良い方だと自分に言い聞かせる。

私が狭い部屋でくつろぎ始めると、彼は神妙な面持ちで椅子に腰掛け、私の差し入れたノートをこちらに広げて見せた。そこには数ページにわたって彼の計画が綴られている。一通りパラパラページを捲り、私は顔を上げて首を横に振った。彼は随分と落胆した様子で、「ダメか」と呟いた。

「ええ、全くもってね。アナタにしては珍しく、落第点ね」

彼は私の言葉に、強いショックを受けていた。その落胆ぶりは、今にも手首をかき切るか、睡眠薬を大量に飲むような素振りにも見える。

「『街』がどんな組織か、アナタもよく知ってるでしょ？ 都合よく実験体が入ったからって、躊躇なく計画立案者を被験体にする組織に、こんな計画では歯が立たない」

私の指摘に、彼にしては珍しく「ああ、そうだな」と素直に頷いた。永らくベツドの中で苦しみに耐え、辛いリハビリに取り組みながら捻り出した計画を簡単に一蹴されれば、どれだけ能力が高く、それに伴う自尊心があったとしても、こうなるのも無理はないか。

私は彼の近くへ身体を寄せ、その頭を優しく撫でた。

「どうしても、逃げ出したい？」

彼の頭を撫でながら、耳元で囁いた。彼は頷きながら、「今すぐにも」と付け加える。変わり果てた怪物めいた顔が、より一層苦しそうに歪む。

「あんな杜撰な計画で、どこに逃げるつもり？」

私は彼のノートをサイドテーブルに放り投げた。他の誰にもできない相談を持ちかける癖に、その計画は彼一人が研究施設を脱するまでの話しか記載されておらず、私はその途中で出てくる使い勝手のいいコマの一つに過ぎないらしい。

これまで献身的に身の回りの世話を焼き、どんなに辛いリハビリにも付き添って、心のケアにも尽力してきたつもりだけど、その想いは微塵も汲み取られておらず、未だに「都合のいい女」止まり。多少は役に立つ路傍の石としか見られていない。

それならそれで、構わない。ただ、彼の計画はやはり問題だらけ。私は自分のカバンを探り、ペンを手に取った。

「研究施設を出て、ちよつと距離を取ったぐらいで『街』からは逃れられない。ロケットでも作って、地表から脱出しない限りはね」

私は彼の計画に、自分の名前を書き込んだ。随所に疑問も書き添え、そこにも自分でできることを追記する。「街」から出る際の逃避行にも、パートナーとして名前を付け加える。

計画を実行に移した際、最終的に一人しか逃げられない場合は、私の名前に二重線を引けばいい。実際にそうなるまでは、二人で逃げ出せるように手を尽くすこれで、彼の残りの人生は私のものになる。

私は加筆した計画を彼に突き出した。彼はそれに、熱心に目を通した。

「良いのか？ これでは君も」

彼は顔を上げ、私をじつと見て言った。私はまっすぐ彼の目を見つめ返し、ゆつくり頷いた。

「君にここまで協力してもらえらるなら、非常に助かる。追記や指摘も、全部ごもつともだ」

彼は再びノートに目を落とす。彼が想像できていなかった部分、事前に必要な道具や準備、逃避行の先やその後の生活、段取りも思いつく限り書き込んだ。あとは、適宜ブラッシュアップしていけばいい。

彼は計画の最後の部分、私が自分の名前を書き添えて丸をつけた部分を指差した。

「本当に、良いんだな？」

「ええ、もちろん」

彼の度重なる質問に、私は即座に返答する。その明快さに彼も色々と汲み取っ

てくれたらしく、彼はそこで一旦ノートを閉じると、そのまま自分の荷物へ放り投げた。

彼は一連の動作の途中、私のカバンの中に、いつも私が事後に吸っていたメントールのタバコを発見した。以前の彼は見向きもしなかったソレを指差し、「一本くれないか？」と彼は言った。

部屋の中は確か、禁煙だったはず。それ以前に、彼の身体で喫煙などもつてのほか。私が「ダメよ」と答えると、彼は「良いじゃないか、一本ぐらい」と勝手にカバンを漁り始めた。私はカバンごと取り上げ、タバコは箱ごと握り潰してゴミ箱へ投げ入れた。

彼は一連の出来事に驚いたらしく、私の顔をジッと見つめている。

「あんまり、勝手なことはしないでちょうだい。外出の偽装も大変なんだから」

私が語気を少し強めて言うと、彼は両手を上げて降参のポーズを取った。

「オレが悪かった。スマン」

彼はスツと頭を下げ謝ると、元の場所へ戻った。

「君と北の方へ逃避行か。かかあ天下になりそうだな」

彼はそう言いながら、優しく微笑んだ。尻に敷かれるようなタイプには思えないが、かかあ天下という響きは、決して悪くない。

「どうせなら、北海道どころか、もっと遠くへ行ってみようか。ロシアどころか、北極点まで」

彼は楽しそうな口調で、妄想をどんどん広げる。国内までなら私レベルの偽装工作でもなんとかなるが、流石に国外脱出、パスポート関連までは心許ない。一旦北の大地で潜伏した後、そこから先は別途考えることになりそうだ。

「駆け落ち、いや新婚旅行みたいなものか」

彼が口にしたフレーズに、私の鼓動は一気に高まる。彼はそこまで考えてくれているとは。なんだか妙にソワソワしてくる。うわついた気持ちで、彼の声に耳を傾ける。

「まさか、君と結婚するとはな。こんな身体になるのも想定外だったが、この展開は完全に予想外だよ」

彼は自分の腕を、もう一方の手で触りながら言った。私は、それを愛おしい気持ちで眺めながら口を開く。

「その身体はどう？」

「どうって言われてもなあ。気分は最悪だよ」

彼は顔を上げ、向かいにある鏡台の鏡に映った自分の姿を眺めた。自分の顔や容姿が、誰もが一度は目を背けたくなるような、醜いものとなれば最悪な気分になるのも仕方がない。

「手術痕や拒絶の痣、見た目の問題は仕方がない。開発や改善の余地もある。ただ、モルモットにされているという事実、機械の身体に成り下がった境遇は、中々受け入れ難いものがある」

彼は極めて自然な口調で、淀みもなく言った。私はそれを耳にして、しばらく相槌も返事もできずにいた。彼は話題を振ったのに無反応の私を見て、「どうした？」と訊いてきた。私はそれにも答えられず、微かに視線を逸らした。

彼なりの価値観、彼の理想論は理解していたつもりなのに、浮き足立っていたところに冷水を浴びせられれば、答えに窮するのにも無理はない。私は彼に見えるような下唇を軽く噛みながら、彼の方を向いた。

彼は何も変わらない。身体がどれだけ変わろうと、私がどれだけ尽くして、教え諭そうとも。でも、それが彼だ。私が人生を賭して尽くそうと思つたのは、彼がこういう人間だからだ。

彼に切り捨てられていった、見た目だけの女たちとは違う。私は彼を否定しない。彼を手放しもしない。手元にあるものは全て駆使して、どんな手段を使っても彼を振り向かせてみせる。

曖昧な愛も、面倒なだけの愛の結晶も、私は決して求めない。

私は、こちらをジッと見つめる彼をベッドへ押し倒し、自分が着せたものを強引に剥いでいく。何も残らない、何もなし得ない人生で構わない。ただただ酔狂に、狂い尽くしたい――。

初出 令和四年二月一〇日 noteにて公開

藤倉の記録 Vol.2

詩恵留の力を借りて一時的に「街」を出た日から、彼女と顔を合わせる機会が格段に減った。私の身の回りの世話をしてくれる係も、他の女性研究員が担当になったらしく、リハビリの現場に付き添ってくれるのも、詩恵留以外の研究員だった。

ずっと世話を引き受けていた詩恵留とは異なり、彼女らはシフトを組んで定期的に入れ替わっているらしい。詩恵留のように自分の専門分野で目ぼしい能力を発揮している人材ではないらしく、新しく入っては出ていく下っ端の小間使い、寿退社を前提とする使い捨ての人材のようだった。

入れ替わりのペースまでは把握していないが、それがどれだけ遅かったとしても、一人一人の顔も名前も、私は記憶できていない。少しでも覚えて心象を良くしようという気すら起こらなかった。

この部屋で、あるいはこの研究施設で、私と言葉を交わす価値がある人間は、こここのセンター長と各セクターのトップ、他には詩恵留ぐらい。私の有益な刺激やヒント、情報を与えてくれる唯一に近い人物だったのに、週に一度、あるいは月に二、三度顔を合わせられれば良いレベルで、その頻度は格段に落とされていた。私は、随分久しぶりに部屋を訪れた彼女に、なぜ頻度を下げたのか、それとなく尋ねてみた。彼女は少々疲れた表情で、小さくため息をつく。

「あなたの計画のためでしょ」

彼女の口調こそキツかったが、その表情や動きはとても柔らかかった。この部屋で目を覚ました時と、大きな変化はないように思える。私は冗談混じりで、気になっていたことをタブレットにぶつけてみた。それでも彼女はいつも通りにテキパキと手を動かし、タブレットに確認した数値を打ち込みながら言う。

「本当に嫌いになったら、いつでも廃棄できるのに？」

彼女は真剣な面持ちで、点滴を操作した。今触っている点滴に限らず、詩恵留が私の身体に繋がっているケーブルや薬を少しでもいじれば、息の根を止めることも、廃人にすることも簡単にできる。

生殺与奪の権利は完全に彼女が握っている。その状況下で私が彼女に嫌われた

のなら、今も息しているはずがない。詩恵留はニコツと笑顔を見せたが、今は逆効果に思えた。

「あなたの計画を遂行するための下準備、研究開発が忙しいの。ただそれだけの話」

彼女はそう言い、更に「わざわざ説明しなくても、分かるでしょ」と付け加えた。彼女は私の腕をベッドの中へ戻すと、記録用の端末を充電器に置いた。私はその腕を掴んだ。

「ちよつと、何？」

彼女は腕を引くが、私は手を離さない。

「また今から、秘密の研究か？」

重要な被験体、目立つ観測対象となった私では、脱走計画に備えた準備、秘密の活動など出来はしない。その分、彼女が真つ当な他の研究と合わせて、二重、三重のカモフラージュを織り交ぜながら、必要な準備を進めてくれている。

彼女の専門以外、「街」を出た後の算段も工夫して根回ししてくれているとなれば、まともな睡眠時間も取れそうにない。私は彼女の顔をジッと見つめる。機械特有の白く滑らかな外皮には、表情ほどの疲れは出ないようだ。

私のセンサーが、勝手に彼女のバイタルを読み取る。そこには明らかに睡眠不足との診断が下されていた。

「あまり無理はするな」

「大丈夫。アナタはそんなこと、気にしないで」

彼女は再び腕を引き、今度は私の腕を振り解いた。彼女は「じゃ、私はこれで」とそのままの勢いで部屋を出て行った。私はいつものように、一人孤独にベッドに横たわり、天井を見つめる。

私も研究者だった頃は、寝食を忘れ骨身を惜しまず、目の前の仕事に没頭した。健康や命など、先のことは二の次三の次。とにかく今できること、楽しいことに全力を投じた。それが人のためであり、周りのためであり、自分のためでもあったから。

彼女も今、彼女なりに研究者として輝こうとしている、限界を超えようとしているのはよく分かるが、それが私の計画のためというのであれば、何かが間違っている。私の杜撰な脱出計画に、命や青春を捧げる価値などない。無事に脱出が叶ったとしても、その先の人生は完全に闇の中なのだから。

彼女が私の元へ訪れる頻度は更に下がった。今は、月に一度、一時間でも顔を

合わせればいい方だ。顔を合わせることがあっても、脱走計画の話や、準備に関する話題は出ない。まさか、どこかで勘付かれでもしたのだろうか。あるいは、研究者として潰されかかっているのでは。

私は追加の手術を終えた後、担当の技術者に詩恵留のことを尋ねてみた。彼は私の顔を直視しないよう、視線を背けた。

「遊川さんですか？ 別に、相変わらず鉄の女って感じですよ」

「勤務時間や、態度は」

「あまり親しくはないので、私も詳しいことは分かりかねますが……」

彼はそう言いながら、自分に与えられた情報端末を操作して、画面を見下ろした。

「特に変わったところはなさそうですね。残業や退席時間は少し伸びてますが、違反ってほどではなさそうです」

彼はそう言いながら、私にその画面を見せてくれた。勤怠データを元にしたグラフが何枚か表示されている。確かに、この数ヶ月で突出した変化は見られない。彼女がデータを改竄していなければ、だが。

私は彼に礼を言い、待機部屋へ戻った。何度か顔を合わせた気がする世話係が、先に部屋へ入っていた。私はベッドの上に腰掛け、彼女が記録用のケーブルを挿すのを待った。近くに来た彼女に、静かに声をかける。

「最近、遊川の様子はどうかかな？」

私の急な発言に、彼女はこちらを向いて一瞬動きを止めた。その表情は、驚きと恐怖に満ちている。私は出来るだけ和やかな表情を作り、ゆっくり同じ質問を繰り返した。すると彼女は、自分の仕事を再開させながら、「最近の遊川さんですか……」と呟いた。

「勤務の様子や、表情は」

彼女は、手を動かしながら「えーっと」と視線を上に向ける。

「普段、そんなに接点がないというか、みんなの輪に加わらない人なので」

「それはつまり、いじめとか？」

私の発言に、彼女は慌てた様子で「いえいえ、そういうことではないです」と言った。一応、元部門のトップ。職場内でハラスメントやいじめが横行していたとなれば、無視する訳には行かない。

「遊川さんが人と関わりたがらないというか、一人でいるのが好きみたいで」

彼女の言い分を総合すると、詩恵留本人がやや内向的で、人とコミュニケーション

ヨンを取るのが得意ではない、研究者にありがちなタイプのようなのだ。情報共有が重要そうな職務を女性同士でやっているにも関わらず、輪に加われないとは。

必ずしも、煙たがられているとは限らない。私と似たようなタイプかもしれない。

「つまり、普段の生活や最近の体調の変化は、本人の自己申告でもないと分からない、と」

私の要約に、彼女は「そういうことになりますね」と同意した。私が彼女に礼を言うと、彼女は曖昧な返事を返し、私をベッドに横たわらせた。最低限の世話と記録をつけ、早々に部屋を後にする。また、いつもと同じ一人の時間がやってくる。

私の起こした計画に則って、別の誰かがスケジュール通りに追加の実験や手術を施す。私は自分の部屋に閉じ込められ、日々の記録を取られては次の実験を待つ。たまたに詩恵留が世話をしに来て、また次の実験、施策が施される。

生きているのか、死んでいるのか。私と詩恵留の計画が前進しているのか、遅延しているのか、あるいは中断、頓挫しているのか。自分の置かれた立場、状況、今後の日々がどうなるのか。唯一、「実験動物である」ということだけが確定したまま、何も分からずに時間が費やされていく。

段々、元の身体や外に出るんだという野望を抱いていたことも忘れつつある。俺はこのまま、詩恵留の手が下ることなく廃棄物へ変化していく。俺はもうダメなんだ。完全に諦めの境地で、来る日も来る日も天井を見上げていた。

初出 令和四年二月二日 noteにて公開

真境名の覚え書き

「本当に、良いんですかい？」

前歯の欠けた男は、しゃがれた声でそう言った。私は、「ええ、どうぞ」と答えた。

皺だらけの人懐っこい丸顔の彼は、私の顔をジッと見る。彼は声を震わせ、「どうしてもかい？」と言う。私が毅然と頷くと、彼は目の端に涙を溜め、「寂しくなるなあ」と荒れた手で握手を求めた。私は彼に世話になった日々を思い描きながら、力強くその手を握り返した。

これ以上ここに居ると、いつまでも後ろ髪を引かれて動けない。真境名のフリをする間に柔和になった自分に驚きながら、「じゃあ」と一言かけて、颯爽と部屋を飛び出した。

私は財布と身分証程度の荷物で、三年弱潜伏したススキノの雑居ビルを後にする。時折すれ違う顔見知り到最后の挨拶をしながら、この街で過ごした日々の長さ、出会った人の多さと温かさに、改めて思い至る。

この風景に詩恵留の姿があれば、私には何の不満もなかった。二人の子供は望めなくても、それなりに幸せな日々を送れると思っていた。寒さには弱い機械の身体、他人のフリをしてモグリの医者、社会的弱者の便利屋をやり続けるのも、不便はあってもそれなりのやりがいはある。ただ、いつまで待っても、詩恵留の姿はそこに加わらなかつた。

知り合いは一人もない街。誰かとすれ違う度に、今のは詩恵留だったんじゃないかと振り返った。どれだけすれ違っても、どれだけ振り返っても、雪の向こうに本物の詩恵留は現れなかつた。

私は札幌駅近くの月極ロッカーに立ち寄った。ポケットに閉まったままの鍵でロッカーを開け、中の荷物を全て出した。全てと言っても、中身は封筒とナップザックが入っているだけ。解約の申請は既にしてある。窓口のスタッフに鍵を渡し、私は店の外へ出た。

札幌駅から新千歳へ向かう電車で飛び乗り、空いている座席に腰掛けた。久しぶりに、封筒の中身を取り出す。詩恵留の直筆のメッセージが書かれていた。

「街」から二人での脱出を画策したものの、考えれば考えるほど不可能であると判断し、彼女は自ら陽動役を買って出て、私一人だけを逃すことに奔走したそう。直前にホテルの一室で見せられたメモだと、二人で逃走する手筈だったのに、それも陽動だったようだ。

私をこんな身体にした直接的な要因、父の車と事故を起こした張本人である真境名大吾、同乗者であった林吾兄弟を協力者に引き込み、裏切ることも織り込んだ上で一人で計画を立てたとは、私が思っている以上に有能な人物だったようだ。彼女に仮死状態にされた後、廃棄場で目を覚ました時用意されていたのは、私と同じ体格、構造に加工された真境名大吾の死体。詩恵留が林吾や保安部隊を相手に陽動を買って出ている間、私はそれとなり変わって外へ脱出するという作戦に切り替わっていた。

変更後の作戦も、全て彼女の手によってアテンドされ、大吾の死体に彼女のメモが、彼女のメモに従って逃走した先、最寄駅のコインロッカーには更に先までの逃走方法を記したノートと、真境名の身分証や財布、預金通帳等が詰め込まれていた。

私は彼女に導かれるまま、彼女の献身的な攪乱に支援されながら、示されたルートで北海道へ逃げ延びた。中途半端に田舎へ潜伏するよりは街中の方が便利がいいと、彼女の指示に従って、そのまま真境名としてモグリの医者、便利屋としての日々を送ることとなった。

あの日、彼女がどうなったか詳しくは分かっていない。札幌に到着してから入手した封筒には、「私はもう死んでいるだろう」との文字が踊っていた。同時に、「私に愛があるなら、蘇らせて」と、私と共に未来へ生きるための蘇生計画まで記してあった。

「街」の設備をどう使って、どう蘇らせればいいのか。私も深くまで知り得ない「街」の秘密、眠らせてある施設の情報まで彼女は私に残してくれた。彼女のデータと、ネフィリム計画の後任候補でもあった真境名の身分証を用いれば、彼女の素性も、「街」や社会に対する復讐も、やりたいようにやれるはず。

まずは、北海道から大阪へ。あの街に戻って、機会を伺う。詩恵留の最期がどうなったかも、脱走に対する戒めとして、記録が残されているはず。

私は真境名大吾として、新千歳から大阪空港まで飛んだ。異様な見た目でも、空気中に漂う膨大なナノマシンやジャミングを駆使すれば、何とでも誤魔化せる。万が一には、詩恵留の残したピューパ銃もある。ナノマシンを使役して、座標や

人物指定で処理するのも朝飯前だ。

家族を殺した人物のフリをするのに、特別な感情は特に抱かなかつたが、真境名という名前は気に入った。特殊な手術の結果、私の目には見えるナノマシンを駆使して何が起きても、機械仕掛けの神を気取って「何でもあり」も許される。

大阪に着いてからどうするか、一人で楽しく妄想を膨らませていると、あつという間に飛行機は大阪空港へ着陸した。ここからは、夢洲にある林吾のボロアパートへ赴こう。詩恵留の残したメモに、奴の住処も書いてある。

私の家族と事故を起こした大吾は「街」に保護され、ネフィルム計画の後任として推薦されるものの、罪の意識を感じたのか、それを断つたとか。一人北海道へ赴任して、現地の社会的弱者の医療を支える仕事に従事したかったらしい。

殊勝な兄とは異なり、お調子者のところがある弟の林吾は、「街」の威光を使つて、身の丈以上に好き放題やっていたらしい。そこを詩恵留に利用され、北海道にいる大吾も巻き込んだ計画へ動員されたようだ。

詩恵留は、大阪へ呼び出した大吾をピューパ銃の試し打ちに利用し、比較的背格好も近かつたということから、私と似たような施術を施し、代わりの廃棄物に仕立て上げた。廃棄場に隠されていた死体が余りにも綺麗だったのは、今も鮮明に覚えている。

お調子者はお調子者らしく、内通者として裏切ることも予想された。そこで、ミスリードの施策も山のように仕掛け、私へ目が向くのをとことん退けた。私が今もこうして生きていられるのは、全て詩恵留のおかげという他ない。

私はモノレールや電車を乗り継ぎ、夢洲駅まで辿り着いた。ここから、林吾の住まいまで、後少し。線路沿いに歩いて行けば、川が見えてくる辺りにボロアパートが見えてくるはず。

私はジャミングを一時的に切り、林吾の部屋の前に立った。静かに聞き耳を立てると、平日の夕方だと言うのに、中からテレビを見ている音が聞こえてくる。私は、呼び鈴を押した。中から男の声で返事がした。

「はいはい、今出ますよ」

ハンコを握りしめた林吾がドアを開け、私を見て動きを止めた。私は彼の口を塞ぎ、ピューパ銃を撃った。彼の体液を分解するように、ナノマシンに指示を出した。彼はその場に崩れ落ちるが、多少物音がしても、周りの住人は何も言っていないようだ。

私は彼の身体を部屋の中へ押し込み、部屋に入って後ろ手に戸を閉めた。私は

証拠が残らないように林吾の身体を綺麗に横たわらせ、防腐や消臭もナノマシンに任せた。

彼は余りここで生活をしていないらしく、外見に比べてそこまで汚れていない。しばらくはここで生活し、詩恵留復活に必要な情報、詩恵留の身に起きた当日の情報を探るようしよう。

「可能なら、この身体ともおさらばしたい。「街」や社会の柵からも自由になりたい。

まずは、世間の目を欺く職探しから始めるか。できれば、医者としての真境名の身分を上手く使いたい。部屋にあった林吾の端末を触ると、ネオネフィリム構想なるフリーズが目についた。種族の垣根を越えた、真のネフィリム計画だと？

私は彼の端末を操作しながら、次の策を考えた。まずはこの男子高校生と接触する方法を考えねば……。

初出 令和四年二月一九日 noteにて公開

甲斐家の追想

天気が良い九月半ばの連休だと言うのに、妻は里帰り出産で二、三日前から留守にしている。部分共有型で父母と同居しているおかげで、五歳になった息子の世話も、日々の暮らしも、それほど不自由を感じない。

ただ、「母親不在」が息子に与える影響は少なくないようで、聞き分けがいいお利口さんだった彼は、ここに来て途端にグズつくようになってきた。週明けには戻ってくる予定だが、それまで保たないようであれば、彼の合流も検討せねばなるまい。

父と母がいるからと、連日遅くまで仕事をしているのも良くなかった。昨夜も起きている間に帰宅することが叶わず、土曜日だから朝からゆつくり過ごそうと思っていたところに、どうしても外へ遊びに行きたいとせがまれてしまった。父、母の協力も得て、無計画なりに、四人で神戸へ繰り出すことにした。

往きの車は、父に運転席に入ってもらい、私は助手席で仮眠を取らせてもらった。有能な自動運転があるとは言え、万が一の手動運転を寝不足では出来ない。電車で移動も考えたが、連休初日のお昼前に、クズつきがちな子どもを連れての長距離移動も正直辛い。

サンデードライバーばかりで渋滞しまくる高速道路、下道を上手く切り抜けないながら、車で移動する方が行きも帰りも楽だろうと判断したが、駐車場の混み具合までは見通しが甘かった。ポートアイランドの動物園も混雑していて、少し離れた駐車場に停めざるを得なかった。

到着早々、息子のトイレに付き合ってから、動物より人が多そうな園内をゆっくり周り始めた。普段は触れない犬や猫、ウサギに触れ合えるコーナーからスタートして、世界各地を再現したブースや、鳥が沢山集まっている池、屋外のドッグショーや羊、山羊への餌やりも一通り回った。

息子はまだまだ元気いっぱいといった様子だったが、流石に父は疲れたらしい。息子は母と共にもう一度小動物を触るコーナーへ向かい、我々は二人で近くのテーブル席で休むことにした。父は椅子に腰掛けたまま、身体を捻って息子や母の方を見ている。私は売店で人数分の飲み物を確保して、テーブルへ戻った。

「この後、どうしようか？」

父は無言で、外より少し高かったアイスコーヒーに口をつけた。

「とりあえず昼メシは、外に出ちゃう方がいいよな。ここだと割高だし、選択肢も少ないしさ」

「車はあるけど三宮か、ハーバーランド方面か。まー君がもう少し歩けるなら、南京町の食べ歩きも捨て難いけど……」

父はアイスコーヒーを一口飲んで、「ま、親子連れならハーバーランドか」と言った。私もそれに同意した。大人だけなら、安くて旨い店も幾らでもあるが、駐車場もあつて、小さな子どもがいても安心できそうなのは、ハーバーランドがベターな気がする。混雑具合にもよるが、パンがモチーフの、人気キャラクターの施設もある。

「メシの後は？ ハーバーランドで終わりじゃ、すんなり寝てくれないぞ」

私の思考でも読んでいたのか、父はその先を尋ねてきた。

移動して昼にありつくのもすんなり行くとは思えないのに、その先の先を見据えているようだ。父の言う通り、この程度のお出かけで、息子の体力が消耗できるとは思えない。山の方へ向かうか、どこかでボールでも買って走り回らせた方がいい気もする。

私はスマホを取り出して、ハーバーランド周辺のスポーツ用品店と、周辺の地図を確かめた。ショッピングモールの中にそれらしい店もあるし、ハーバーランドからちよつと歩いて、メリケンパークで遊ばせる手もありそうだ。

「お待たせ。もう、満足したつて」

母の声に振り返ると、満足げな顔をした息子が母に手を引かれて立っていた。これなら、水分補給して外へ出ても、グズることはなさそうだ。息子を父と母に任せ、私は一足先に車を取りに向かった。少し離れた駐車場を行き来して、動物園の出口で父と母、息子をピックアップする。彼らは手際よく息子のトイレも済ませておいてくれたらしく、ハーバーランド近くの駐車場へ車を停めるまで、トイレ休憩を挟まずに済んだ。

親子連れでこつた返すハーバーランドを、息子の手をしっかりと握って奥へ進む。飲食店が立ち並ぶエリアまで来ると、少しでも早く入れそうな店を探して、整理券を取得した。キッズメニューもある神戸牛の店らしい。多少値は張るが、ちよつと早い敬老の日と思って、父と母には贅沢してもらおう。両親にはワインも頼んでもらって、私はつましく、一番安いものを頼んだ。

こういうところで、息子が行儀よくしてくれるのはありがたい。それもこれも、妻や両親の躰のおかげだろう。ステーキにかじりついた息子に「旨いか？」と尋ねると、彼はソースを口の周りに飛ばしながら、「うん」と満面の笑みで答えた。「本当にいいのか？」

父はワイングラスを片手に、私に尋ねた。帰りの運転を気にかけてのことだろう。母は、そんな父を冷やかな目で見ている。こんな時ぐらい、素直に楽しめばいいのに。私が頷くと、「じゃあ、遠慮なく」と父は母と乾杯をして、食事を開始した。母は時々息子を気にかけてながら、父との外食を楽しんでいるようだ。私は自己満足に浸りながら、息子の世話を焼きつつ、彼が食べ切れなかった分を頬張った。食べ残した付け合わせの野菜は、自分で食べるように促した。強い言い方で無理強いはず、どうしても食べられないものは私が食べた。

終始和やかな雰囲気のまま、昼食を終えられた。港の見えるこの場所で、楽しい時間を過ごしている。ここに、妻や生まれる予定の娘が居合わせていないのが残念に思えた。また今度、違う店でも構わないから、父や母を連れてここに来よう。その時は、電車で来るか、一泊したい。

結局、父と母はそれぞれ赤ワインを二杯ほど飲んだ。ほろ酔いというほどでもなさそうだが、人混みの中でもちよっぴり上機嫌に歩いてくれるのはありがたい。隣のショッピングモールへ移って、スポーツ用品店に向かった。

小さなサッカーボールか、ゴムボールが一つでもあれば十分だ。息子が蹴って走り回る分には十分そうなサイズの、ミニサイズのボールを購入し、メリケンパークの芝生エリアまで父母を引き連れて移動した。

芝生が広がる場所まで来ると、息子はボールなど関係なしに走り始めた。私は彼が変なところへ身体をぶつけないか、少々慌てながらフォローに回った。予測不能な動きに備えながら、延々と中腰で素早い動きに対応するのは中々辛い。

父母は、少し離れたところで我々や、近くを行き来する船を見ているようだ。走り回ることに飽きてきたらしい息子に、ボールを投げてみる。彼はボールを蹴り返すか、投げ返すかしてくるかと思いきや、一人でボールと戯れ始めた。息子の制御下から抜け出したボールは、父母の方へ転がっていく。ボールに気がついた父は、それを拾って息子に手渡した。

「どうしたの？ ばあちゃん」

息子は、海の方をジッと見ている母に声をかけた。普段なら、すぐ息子を気にかけてくれる彼女が、彼に声をかけられるまで無視するなんて珍しかった。母は、

「あ、ごめんなさい」と言い、横にいた父が「ばあちゃんは、昔を思い出してたんだ」と息子に語った。

「昔？」

「ああ。ズーっと、ズーっと昔のことだ。まー君のパパが生まれるより前、私もまだ子どもだった頃の話だ」

「ちよつと、そんなに強調しないでくださいよ」

母の抗議に、父は「すまん、すまん」と謝った。母は若かりし頃、近くの港へやってくる船に乗って、故郷の大分から出て来たのだ。同郷の父と大阪で出会い、結婚して子供を授かった。

「僕も、乗ってみたい。ばあちゃんの思い出の船に」

息子はボールを胸の前で抱えながら、母を見上げた。

「ばあちゃんも乗ってみたいでしょ？」

息子のわがままに、母も満更ではなさそうだった。こうなると、無碍には断れない。息子を父母に任せ、フェリー乗り場へ航路と運賃を確かめに行った。完全に母の思い出とは無関係な航路だが、南港へ向かう短い航路があるらしい。車を取ってきて、帰り道はフェリーという選択肢も十分ありだ。

私は父、母と相談して、フェリーへ乗船することにした。出航時間を確かめ、チケットを購入し、車を取ってこなければならぬ時間まで、ゆっくり息子を走り回らせることにした。

フェリーに乗ると決めた時の母の顔は、これ以上なく喜んでるように思えた。

初出 令和四年二月二八日 noteにて公開

江辺野の備忘録

附属病院のロビーから自分の研究室へ一緒に移動してきた私に、小津教授は意地悪そうな笑みを浮かべた。

「まだ思い出せない？」

彼は、病院のロビーで見かけた男子高校生のことを、私に尋ねた。そのきっかけは私が作ってしまったとは言え、流石に引き摺り過ぎだと思ふ。ただ、そのしつこさ、執念深さが研究者として一流の業績に結びついている可能性もなくはない。かつての私にも、彼の小指の先ほどの執念深さがあれば、職員ではなく教授として雇用されたかもしれない。

今更嘆いても仕方ないことを考えていると、小津教授は「十年前の、事故の関係者だよ」と正解を教えてくださいました。

「ほら、お宅の下の子と同年とか言つてたの、覚えてない？」

小津教授の言葉で、当時の記憶を鮮明に思い出した。次女と同年の男の子が大きな事故に遭い、無事が分かるまでニュースを見ながら、気になつて仕方がなかった。確か、この春から次女と同じ高校に進学し、クラスこそ違うものの、密かに有名な人がいると娘からも聞いていた。

その彼が、妙な縁で附属病院のロビーにいたとは。

「彼の祖母が事故の後遺症で、下半身に不自由を抱えていてね。そのリハビリに付き添いで来てるそうさ。彼の妹も妹で、先天的な発声ユニットの不具合があつて、この病院にはそれなりに付き合いがあるらしい」

小津教授は、自分の研究以外には興味がないように見えて、意外と情報通のようだ。

「で、興味深いのはここからだ」

彼は勿体ぶつた口調で、新しいような資料を取り出した。

「何がそんなに興味深いんです？」

「さつきも言つたら？ 先天的な不具合があるって」

彼は資料に書き込みを加え、注視するところを明確にした。私はそこを見て、思わず「あつ」と大きな声を漏らした。口に手を添え、小津教授に謝つた。

「流石は江辺野くんだね。そう言うこと」

彼は僕の目を見て微笑んだ。純粋な研究職ではない私がなぜ呼び込まれたのかも、なんとなく理解した。

「不思議なもんだよね。工業製品みたいな彼らでも、有性生殖でこんな現象が起こりうる。お宅のお子さんみたいな現象と掛け合わせたら、面白いことが起こると思わない？」

小津教授は、純粋な生命科学の話として、ケラケラ笑いながら言った。彼のこの発想のおかげで、次女の生来の病は克服できたとも言えるが、実験動物やサンプルとして見られ続けていると言うのは、あまり気分がいいものではない。

ただ、投薬治療によって救われた体験を持つ次女は、この男を崇拜に近いレベルで尊敬し、思春期の頃から研究室に出入りして個人的に教を仰ぐようにもなっている。それをそのまま容認していても大丈夫なのか、一人の父親としては正解が導けなかった。

「それと、もう一つ厄介事を頼まれてくれない？」

小津教授は、今度は分厚いファイルを書棚から取り出した。ラベル、タイトルはまだ付けられていない。彼に一言断り、中を確かめさせてもらおうと、一枚目からいきなり「ジョセフ・グリーンバーグ」の文字が載っていた。

私は思わず顔を上げ、「これ、まずいんじゃないですか？」と、ファイルを閉じた。

「街」の研究施設より監視体制は緩いとはいえ、こんなところでこんなものを読んでいるのは、私も私の家族の身も危うくなる。

小津教授は、私がファイルを突き返すのを冷静に見つめていた。

「それがどういふものか分かるなんて、随分優秀なんだな。君は」

「小津先生ほどじゃないですけどね」

私の言葉に、小津教授は鼻で笑っただけだった。私もこの大学、そして「街」の一員。触れていい情報、持ち出している情報は理解しているつもりだ。それを彼は、堂々と私に見せ、なんらかの共犯者に仕立てようとしている。

小津教授は、私が突き返しているファイルを、一向に受け取ろうとしない。私は受け渡すのを諦め、手元にそれを置いた。彼は、「そう、それでいい」と言った。

「君には、それを何部か複製して、上手く保管しておいてもらいたい。さつき渡した資料も一緒にして、だ」

こんなものを複製して、保管しろ？ 上手くやれ、という指示は結構だけど、

流石に無理が過ぎる。小津教授は、内心狼狽まくっている私に、「大丈夫だ。心配するな」と言った。

「グリーンバーグの言及した核心には触れていない。彼の資料も、個人は特定できないように処理してある。どちらも、ただ見るだけでは何の問題もない」

小津教授は堂々たる口調で言い放つが、グリーンバーグの名前や研究に触れている時点で、危ない気がする。彼自身の先行研究で、散逸しないように資料をまとめておきたい気持ちは分かるが、彼とこの資料、追加の新資料を一緒にしておくのは危険過ぎる。

私は、資料の中身を精査したい気持ちを抑えつつ、小津教授の頼みを断った。食い下がられるかと思いきや、彼はあつさり、「そうか」と言った。

「他にも当てるはあるから、忘れてくれ。わざわざ時間を取ってもらったのに、申し訳ない」

小津教授は、心底申し訳なさそうに、私に頭を下げてくれた。私はその様子にいたたまれなくなり、「気にしないでください」と彼に言った。ただ、次女が彼に接する時間は減らした方がいいかもしれないと、心の中で密かに思った。

小津教授は椅子に座り直し、私と向かい合った。

「それで、用事は何だっけ？」

彼に持ちかけようとした相談は、長女の「乗り換え」に関する話だったが、娘らの恩人だからといって、深く関わり過ぎるのは良くないかもしれない。長女の話だって、昔から見てくれていて事情に明るいからと言うだけで、別に彼でなくとも構わない。

私は腕時計を確かめ、できるだけ自然に聞こえるよう、「ああ、しまった」と言った。

「次の予定があるのを忘れてました」

彼は「何だよ、それ」とブツクサ言いながら、「大した相談じゃないなら、いいよ。また今度で」と私に早く出て行くように促した。私は、「せっかく、時間を取ってもらったのにすみません」と頭を下げ、足早に研究室を後にした。

できるだけ他の人に見られないよう、構内をあえて遠回りして、職員室へ向かった。病院のロビーを横切ると、例の男子高校生が目についた。リハビリを終えたおばあちゃんを出迎えて、今から自宅へ帰るようだ。私はつい立ち止まり、彼らがロビーを出て行くのを見守った。

すっかり大人びたその顔と、かつてニュースで見た五歳ぐらいの幼い顔を一致

させるのは至難の技だったが、かすかに面影はあるように思えた。優しそうな目つき、大人しそうな雰囲気は、非常に好感が持てる。そんな彼と、同じく優しそうな雰囲気のおばあちゃんのやりとりを見ていると、今日は早く仕事を終えて、娘たちの顔を見たくなってきた。

私は彼らを見送ると、颯爽と職員室へ戻った。長女の「乗り換え」の問題はただ何の解決もしていないが、それはそれで、じっくり家族会議をしよう。煙たがられるのは覚悟の上だ。

私は自分のデスクで、今日のスケジュールと残りのタスクを確かめた。割り込みの書類作業、自分の担当とは思えない新たな仕事も割り振られている。ここで文句を言っても始まらない。定時で終えて帰宅するには、片っ端から処理していかねば。私は密かに腹を括り、集中力を保つためにタイマーもセットした。これで、今日は残業なしだ。

怒涛の勢いで脇目も振らず、目の前のタスクをどんどんこなした。徐々に気分もハイになってくる。これなら余裕で、娘たちと一緒に食卓を囲める。ホッと一息ついたのも束の間、目的不明の会議が飛び込んできた。事前のレジューメもなしに、なぜか私も参加者に含まれている。

終わる時間が読めない、長そうなタイプ。これでは、流石に定時は無理だ。私は心の中で、長女と妻に「すまん」と詫びて、自分の筆記具を持って会議室への移動を開始した。

初出 令和四年一月二十九日 noteにて公開

米利の独白

宿直明けの屋外は、春の陽気に満ちていた。

報告業務をオレに任せ、一足先に勤務を終えたはずの織林は、玄関脇に立っている警備の兄ちゃんと楽しそうに喋っていた。オレを見つけた彼女は、こちらに向かって大きく手を振った。

「なんだ、まだ居たのか」

オレは、黒いロングコートにパンツスタイルの織林を一瞥した。さつきは春の陽気と表現したが、肌を刺す陽光や日向の気温は既に初夏の様相を呈している。彼女の女優めいた大きなサングラスは正解かもしれないが、それ以外の出で立ち
は明らかに場違いだ。

オレが織林の横まで来ると、彼女は話を切り上げ、同時に歩き出した。まるで、オレが出てくるまで待っていたような歩きぶり。オレは歩く速度を少し上げ、歩
きにくそうな靴を履いた彼女を引き離しに掛かる。

「ちよつと待ってください。一緒に帰りましょうよ」

織林は小走りにオレを追いかけると、再び横並びで歩き始める。

「朝まで一緒に過ごした相棒じゃないですか」

「だから、しばらく見たくないんだよ、その顔は」

オレがそういうと彼女は、「え、こんな美人の顔を？」と言った。客観的に見て、彼女が自信たっぷりに言うだけの器量は備わっているように思う。そこに異論はないが、それは飽くまでも、外見だけを切り取った場合の話かつ最大公約
数的な好みの話。性格その他の中身や、発言の残念さを知る身には「無駄に美人」と言うよりは「美人の無駄遣い」といったところだろう。

背は高く、脚も長いモデル体型だとは思うが、オレの好みとしては物足りない。
オレが向かう先と織林の目的地は異なるはずだが、なぜか彼女は延々とオレの
後をついてくる。オレにも聞こえる音量で、一人かしましくしゃべり立てている。
角を曲がれば最寄駅が見えてくる十字路で、織林は「あ」と上を向いて立ち止
まった。オレもその声につい足を止め、彼女が見たものを追いかけた。視線の先
には、一本だけ植えられていたソメイヨシノがあった。満開の時期を僅かに過ぎ、

葉桜と化しつつある。

桜が植えられているのは、街の一角にある小さな公園。遊具も少なく、遊びに来る子どもたちも滅多に見かけない。織林はその公園へ足を踏み入れ、桜の近くに備え付けられていたベンチに腰を下ろした。彼女はオレを手招きする。

「先輩もほら。隣、空いてますよ」

彼女はベンチの空いた場所を手で示すが、オレはそれを無視して駅へ向かうべく足を動かした。織林はベンチから腰を上げ、オレの側までやってくる。

「どうせ、今年のお花見してないんでしょ？ 今、しましうよ」

彼女はオレの腕を取り、力尽くで公園の中へ引き入れようとする。オレが「いいよ、別に」と何度言っても、彼女はオレの腕を離そうとしない。

「彼女も居ないって言ってたし、一緒に行く人もいないんでしょ？ 昼勤のみんなは今日やるって言ってたし、今見ないと、なんか悔しいじゃないですか」

彼女が居ないのも、一緒に花見スポットへ出かけるような予定も今の所は無いが、織林の私情に無理矢理付き合わされる道理も、オレにはない。ただ、このまま解放してもらえとも思えない。オレは渋々彼女の提案に乗り、その公園で花見をしていくことにした。ただ、織林の隣には座ってやらない。

観念したオレがベンチの側で桜を見上げていると、織林は「あ、そうだ」とカバンから財布を取り出した。

「お花見に大事なものを、忘れてました」

彼女はそういうと財布だけを握り締め、公園の出口へ向かう。出口で足を止め、こちらを振り返る。

「すぐ戻って来ますから、待っててくださいね」

織林は笑顔を浮かべながらも、力強い目で小さな子供へ言い聞かせるように言った。オレは、「ああ、分かってる」と答えた。彼女はオレの言葉を素直に信じ、公園を出て行った。このまま律儀に彼女の荷物を見張っている道理もないのだが、約束したからには最後まで付き合おう。

このまま帰っても、風呂に入って飯を食って寝るだけ。五分、十分も付き合えば、織林も満足するだろう。かなり面倒臭い相手とは言え、一応は相棒だ。少しぐらいご機嫌取りをしておいてもバチは当たるまい。

一人でベンチに腰掛け、一本だけの葉桜が時折散っていくのを眺めていると、ビニール袋を下げた織林が、息を切らしながら戻ってきた。袋の中には、飾り気が少ない切れ味強めの銀の缶が二本入っていた。

コレを下げた走って戻って来たとなると、嫌な予感しかしない。織林は「先輩も、同じので良かったですよ」などと言いながら、中の一本をオレに差し出した。オレは何も言わずに受け取り、彼女が先に栓を開けるのを待った。織林は器用に、中身を噴き出させずに開けると、即座に口をつけた。

悪い方に考え過ぎかもしれないとも思いつつ、噴き出してもいい方向へ口を向け、ゆつくりと栓を開けた。プルタブを持つていた手は少々濡れたが、大惨事は免れた。本来なら自宅で風呂に入った後に味わう一杯。織林の隣とは言え、仕事終わりの一杯は旨い。

「いやあ、平和ですねえ」

織林は缶ビールを片手に桜を眺めながら言った。彼女の足元には、踏まれまくった桜の花びらが散っている。

「西の空き地署に配属って言われた時はどうしようかと思いましたが、良いところですね。残念ながら、歯ごたえのある事件には遭遇しませんけど」

「事件も事故も、オレたちの出番なんてない方が良いんだよ」

織林は「そうですね。失礼しました」と、舌を出して笑う。この街で起こる事件なんて、せいぜい酔っ払い同士の喧嘩か、クソガキの万引き、たまに少額のコンビニ強盗や心中めいた事件が起こるぐらい。今日も、駐禁トラブルとか夜中の痴話喧嘩とか、その程度だった。

「空き地署って言い方は、止めとけよ。空き地だったのは、せいぜい二〇〇年前までだ」

「重ね重ね、すみません」

織林は後頭部を触りながら、オレに謝った。オレも内心では空き地とか、忘れ去られた土地のように思っているから、謝られる筋合いもないのだけど。

オレは缶ビールをさっさと飲み干すと、財布から五百円玉を取り出して織林に押し付けた。彼女が受け取りを拒むのなら、カバンの中に放り込むまで。彼女は、「良いですよ、別に。私のワガママですから」と言うが、オレは「後輩の利益供与は受け取れないね。お駄賃も込みだ。取っておけ」と言いながら、空き缶を握りつぶした。

オレは「さて」と声を出して、ベンチから腰を上げた。まだビールが残っている織林は、急に立ち上がったオレを見て、「先輩？」と声を上げた。オレは「こゆつくり、どうぞ」と言い残し、公園を後にする。背後で、織林がかまびすしい。オレはまっすぐ駅に向かった。途中の自販機に備え付けられていたゴミ箱へ空

き缶を捨て、改札前まで行つたのに、電車には乗らずに駅を通り抜けた。せつかくの陽気を楽しみながら、ゆつくり帰ろう。

自宅までの道のりをケータイでぎつくりと確かめ、鉄道と直交する大通りに沿つて、東へ進んだ。歩きながら目に入る木々にも、桜餅のような色合いを見てとることが出来た。折角だし、どこかで和菓子屋に寄つて、季節の甘味を買つて帰ろうか。

ケータイで近所の和菓子屋を検索し、大通りから外れて小径へ移つた。左手前方に、小ぢんまりとした教会が見えた。平日の午前中だと言うのに、外まで人だかりが伸びている。邪魔にならないよう、向かいの歩道から前を横切ると、白い衣装に身を包んだ男女が奥の方に見えた。どうやら今から、結婚式のフィナーレのようだ。

桜吹雪も浴びながらの結婚式とは、なんとも幸せそうだ。見知らぬ二人の前途を密かに祈りながら、オレは向こうの方に見えてきた和菓子屋の幟に心を躍らせた。

初出 令和五年一月一五日 noteにて公開

久しぶりに藤倉を連れ立って「街」の外へ出ると、彼は心身ともに相当疲弊しているように見えた。彼は、ホテルの部屋へ入って腰を落ち着けると「見捨てられたかと思った」と打ち明けた。

「ごめんなさい。あなたの衰弱も、計画のうちだから」

私が彼に謝ると、彼は「ちゃんと教えておいてくれよ」と言った。

「こんなところへ呼び出したということは」

「ええ。もうすぐ実行に移す」

私は彼に、再検討した計画を記載したメモを差し出した。彼はそれに目を通し、眉を上げた。

「随分、大胆に変えたんだな」

私は彼に頷いて答える。準備を進める過程、入念に検討を加える過程で、当初の計画はほとんど見直しを掛けていった。情報漏洩を防ぐため、彼への説明もほとんど実施せず、私が独断で計画を進め、水面下であらゆるものを手配した。

「それで、オレはどうすればいい？」

彼はメモを持ったまま顔を上げた。彼にしては珍しく、私に全てを委ねてくれるらしい。私は彼に、「メモの通りに動いて欲しい」と伝えた。

「何があっても？」

彼は私の言葉尻を捉え、それを繰り返した。私が頷くと、彼は「了解」とメモを畳んで私に返してきた。私はそれを受け取り、備え付けられていたゴミ箱に放り捨てた。彼はそれを見ながら、「そんなところに捨てて、大丈夫か？」と言った。

「これも、計画通りだから」

私がそう言うのと、彼は「なるほど」と頷いた。彼のことから、あんなメモは一発で頭に入ったと思うが、当日の段取り、指示は別途用意してある旨も伝える。

「北海道までの逃避行か。楽しみだな」

彼は笑顔を残し、先に部屋を出た。彼はそのままいつもの待機部屋へ戻る。私はそこで彼と別れ、夜景が見える最上階のレストランへ移動した。個室に案内さ

れると、先に到着していた協力者、真境名鈴吾がステーキを頬張っていた。彼は中がまだ赤い肉に、赤黒いソースをたっぷり付け、それを口に運ぶ。

私はその様子に、さっきまで取り掛かっていた作業を思い出した。彼の気を悪くしないよう、ハンカチで口元を押さえ、込み上げた嫌な記憶を必死に忘れようとした。

「ごめんね。腹減っちゃって」

彼は食事の手を休め、口元についたソースを拭う。私は彼の向かいに座り、ハウスワインの白だけを注文した。普段なら彼に合わせて赤を頼むところだけど、今日だけは赤い物を遠ざけたい。

私は、自分のことは気にするなと彼に伝え、食事を続けてもらう。彼はステーキのカットを再開しながら、顔を上げた。

「計画は順調？」

「おかげさまで。本人にも、ちゃんと伝えたわ」

鈴吾は「そう？ それは良かった」と、屈託のない笑顔を見せた。その優しい笑顔に絆され、肌を重ねたこともある。それがきっかけか、藤倉の脱走計画に彼も快く協力してくれ、彼のおかげで脱走後の計画も実現可能なレベルへ落とし込むことができた。

「指定された牧場に渡されたブツもしっかり埋めたって、兄貴から連絡もあったよ」

私は彼の食事を見守りながら、手元に届いたワインに口をつけた。ただ、ステーキにナイフが入る様は延々と見ていられない。私は窓の外に広がる夜景に視線を向ける。

「でもさ、最後が牧場のタイムカプセルっていうのは、安直すぎない？ そんな映画、なかったっけ。モーガン・フリーマンも出てた、確か……」

鈴吾はこちらの反応など微塵も気にかげず、一人で楽しそうに喋っている。私も一応耳を傾けるけど、話の内容は全く頭に入っていない。彼は一人でひとしきり盛り上がると、手を止めて視線を私に向ける。

「ただ、兄貴と電話が繋がらなくてね。詩恵留ちゃん、心当たりある？」

彼は私を真っ直ぐ見て言った。その目は、私に助けや答えを求めているという様子ではなかった。

「完了の連絡をもらったから、お礼を言おうと架けてみたんだけど、反応がなくてね」

「実弟のアナタが分からないのに、他人の私に分かる訳ないでしょ」

私が見つめ返し、突き放すように言うと、彼は「それもそうか」と納得したようだった。私は彼のペースに合わせ、グラスを傾ける。酔っ払って忘れないうちに、部屋の鍵を彼に差し出した。

「アレ、もういいの？」

「ええ。後は、アナタの本妻と楽しんで頂戴」

私はグラスに残ったワインを飲み干すと、ウェイターを呼んだ。彼の食事と合わせ、私のカードで支払った。鈴吾は「そんな、悪いよ」と言ったが、私はこれまで手伝ってくれたお礼も兼ねているから、と断った。

「じゃ、お先に」

私は食事を終え、身支度を整えている鈴吾を置いて、レストランを出た。彼はその後、ロビーに呼びつけていた彼女とさっきの部屋で落ち合い、愛を語り合うはず。名簿で問題があるようなら、彼らがいい具合に処理してくれる。

私は足早に「街」へ戻り、白衣を纏って先に帰っていた藤倉の元へ移動した。

彼は先ほど見せたメモの通り、いつものベッドに仰臥している。私はその顔を眺め、大きな息を一つ吐いて、覚悟を決めた。白衣のポケットに忍ばせておいた小瓶を取り出し、部屋にしまっておいた注射器を取り出す。

藤倉の点滴に小瓶に入っていた薬を注入する。それまで安静にしていた藤倉の身体は急に震え出し、ベッドの上で激しくのたうち回った。彼を観測していた機器は、バイタルの異常を検知し、看護要員を呼び出しにかかった。

私はそれを受理したフリをして、部屋に駆けつけた女性研究員たちに、藤倉の死亡を告げた。彼女らは、私の言葉を追認するように藤倉の身体を確かめ、彼が息絶えたことを確認した。

心臓マッサージ等で蘇生術を施そうにも、彼は既にそういう身体ではない。無理に延命措置をとるような素体でもない。新たに駆けつけた責任者も含め、「廃棄処分」という結論を下した。私はその言葉にショックを受けながらも、彼の遺体は私が捨ててに行くと申し出た。

全会一致で承認され、部屋から私以外の人員が出たのを確かめると、彼の身体に繋がっていた各種ケーブルを外し、機械の力も借りて、横付けしたストレッチャーへ遺体を移した。顔と身体の上に布を被せ、彼の重さをしっかりと感じながら、ありつただけの力を加え、被験体の廃棄物処理場へ、ストレッチャーを押して行っ

た。

火葬場の焼き場へ踏み入るような感覚で、所定の部屋に入った。そこで私は監視カメラにダミーの映像を流し、藤倉の乗ったストレッチャーをそのままに部屋の外に出て、外側に鍵をかけた。

あとは彼がうまくやってくれることを祈って、私はその場を後にする。

私は自分の研究室へ戻り、羽織るものを白衣からコートに切り替えた。この日のために作っておいたボールペンのような小型の銃をポケットに入れ、机の上にあつた端末のキーボードを操作する。身近なコマンドを入れ、エンターを押すとタイマーが表示された。

部屋のドアがノックされる。私は部屋の灯りを落とす、廊下に出た。ドアをノックしたのは、鈴吾の彼女だった。鈴吾は鈴吾で、少し離れたところで「街」の保安部を数人従えてこちらを見ている。

「何かご用かしら？」

「ええ、あのー、ホテルの利用で問題が……」

目の前の女は、どうでもいいことを延々と述べている。自分の用事だろうに、鈴吾は女の後ろに控え、十分な距離を取って離れているのが腹立たしい。私はポケットの小銃を抜き、空いた手で女の身体を拘束した。こめかみに銃を突きつけ、鈴吾たちに道を開けるように迫る。鈴吾の後ろにいた保安部は立派な銃を構え、鈴吾と私の間に割って入った。鈴吾は彼らの後ろで狼狽えている。

「そこを空けなさい。空けないと彼女を撃つわよ」

私の本気で迫っても、保安部は問答無用で引き金を引こうとする。彼らには、取るに足りない一市民。秩序のため、施設の裏切り者を排除するためなら、犠牲を厭わない。私が悔しがって歯を食いしばっていると、研究室のこここで爆発音が鳴り響いた。背後にあつた私の部屋も、時間差で爆発した。熱い空気と強烈な衝撃が私を通り過ぎていく。

「街」が警報と混乱に満たされる。私は狼狽している保安部に向け、引き金を引いた。彼らは少し時間を置き、身体の穴という穴から血を噴き出して倒れる。鈴吾はそれを見て、尻餅をつく。私は彼を見下ろしながら、彼の女に銃を突きつけたまま、「街」の外へ向かつて廊下を走り始めた。

織林の調書

私が自分で持ち込んだティーセットを眺めていると、近くを通りかかった先輩が、後ろから声をかけて来た。彼は自分の肩を指圧機で器用に刺激しながら、「そんなもん、全部要らん」と言った。

「オレには違いが分からん茶葉も、全部持つていけ」

彼は私が大事に取り置いていた紅茶の缶を、片っ端から段ボール箱に詰め込んだ。高級とまでは言わないものの、それなりに良い値段のするお茶つ葉なのに、気軽にポンポン放り込まれるのは心外だ。

「横のポットと、保温カバーも忘れんなよ」

彼はひとしきり注文を付けると、自分のデスクへ戻った。午前中から置きっぱなしになっていた、すっかり温くなったコーヒーを一口啜る。

「本当に、全部要らないんですか？」

「ああ、結構だ。誰かが来ても接待することはないし、現場に赴いて『最後に一つだけ』と質問するようなこともないしな」

先輩は私のデスクに目をやると、指圧機で私の私物を指した。

「悪趣味な写真も『きらきら星』のCDも、引き出しの中の大量のカップ麺も、全部引き上げるんだぞ。いいな？」

彼はデスクに立てておいたグルメ雑誌も指摘した。私は、「はくい」と気の無い返事をして、片付けに戻った。

先輩と二人世帯の部署に異動させられて、そろそろ一年半。完全に物置だったデッドスペースを二人で作り替え、それなりに居心地の良い秘密基地っぽくなくて来たのに、私の任務が終了してしまった。

紅茶関連を片付けてから、デスクの原状回復に移行する。被害者になりきって横たわった姿の現場写真は、フォトフレームごと箱に入れ、残りの荷物も片っ端から詰め込んでいく。つい先日、甲斐くん達の卒業式で撮った写真も出て来て、手を止めてしまう。

「あのなあ、さつさと片付けねえと終わんねえぞ。再来週には新天地だろうが」
手元の書類を見ていたはずの先輩は、顔を上げて私を見ていた。私は今出て来

た写真を拾い上げ、「コレは要りますよね？」と彼に尋ねた。彼は写真を見もせず、首を振った。

「ちよつとぐらい、私との思い出とか要らないんですか？」

「全然。お前のことより、新人の引き継ぎで手一杯だよ」

彼は手元の書類を見ながら、後頭部を掻いた。私と入れ替わりで来る補充要員には、私の完璧な書類、データがあるから問題ないはずだけど、先輩はそれを信用していないようだ。

甲斐くん達との記念の一枚も、不要と即決するような先輩だ。あれから一年半で、血も涙もない冷血漢になったのだろう。ただ、そうなるのも仕方ないような部署、日陰仕事の連続ではあった。

大事な写真をファイリングしてカバンにしまっていると、時計を見やった先輩が、「おい、そろそろ」と言った。私も壁掛け時計を確かめると、そろそろ外出する時間になっていた。

「じゃあ、行つてきます」

「おう。嬢ちゃんに、よろしくな」

私はやりかけの片付けを再開しやすいように整頓し、先輩の業務を妨げないところへ荷物を押しやった。黒いコートと大きなサングラス、カバンを持って「お先に失礼します」と部屋を出た。

お昼休憩をずらして、無理矢理半休を取らせてもらった。西の空き地署を出て、最寄駅へ向かった。改札前に行くと、先に到着していた桂花ちゃんがそこに居た。彼女の卒業式以来、二週間ほどの間に随分と練習したらしく、メイクがバッチリ決まっていた。もうすぐ大学生だぞっていう、気合いみたいなものがバチバチに漂っていた。

「なんか、わざわざゴメンね」

「いえいえ、こちらこそ。こつちの都合ですみません」

彼女に「どうする？」と訊くと、彼女は近くのファミレスで良いと言った。もつと高そうなところ、美味しいものが食べられそうなところも沢山あるだろうに、「一杯喋りたいから」だそうだ。

彼女に決定権を委ねると、友達とよく行く店にするらしい。彼女に先導してもらって、目的のファミレスに到着した。ランチタイムには少し遅い時間帯とは言え、土曜日の午後だとそれなりに混雑している。待合室で五分ほど待たされてか

ら、ようやく中へ入れた。

定番メニューと期間限定らしいメニューを渡されても、私にはよく分からない。来店頻度が高い桂花さんは、パパッとメニューを決め、ドリンクバーもセットにした。私も同じものを頼み、順番に飲み物を取りに行った。

「卒業旅行は、週明けからだっけ？」

飲み物を取って戻ってきた彼女は、小さく頷いた。

「じゃあ、甲斐くん達と？」

「男子となんか行きませんよ。女子三人でリベンジ旅です」

彼女の力強い物言いに、私は頷くことしかできなかった。結局、あの騒動のせいで行けなかった修学旅行、北海道へ班分けの時のメンバーで赴くそうだ。

「二泊三日で戻って来たら、直ぐに学校なんですよね」

彼女はそう言いながら、運ばれてきたばかりの熱々のドリアに手を付けた。私の手元でも、チーズが良い香りを放っている。

彼女の場合、ほぼ地元の命輝大学に現役合格したと聞いている。第一志望の学部ToStraitで受かるとは、素晴らしいの一言だ。

「その間に異動しちゃうなんて。寂しくなるなあ……」

彼女はスプーンでドリアの表面を軽く突きながら、溜め息を漏らした。

「別に死ぬ訳じゃないし、お父さんに聞けば、連絡先も貰えると思うよ」

「本当に？　じゃあ、お土産も送るね。何がいいかな？」

彼女は顔を上げ、嬉しそうに笑みを浮かべた。普段はちよつとイケメンチックな顔立ちが、急に可愛い印象が変わるのだから、このギャップはグツと来そうだ。

グツと来て然るべき特別な相手、甲斐くんは、結局彼女を落とせず仕舞い。桂花ちゃんも桂花ちゃん、別に彼を特別視している様子はない。恋愛にあまり興味がないのかと思いきや、男性アイドルの推しメンの話、どの若手俳優のどんなところがカッコいいのかなど、延々と喋ってくれる節もある。

ドリアを突きながら、彼女はいつもの様に日々の出来事、気になったことなど、取り止めもない話を私にぶつけてくれる。私も私で、先輩の話や仕事に関する愚痴を彼女にこぼす。変に遠慮しないで、好きなだけ語り合える身近な相手。その貴重な存在とも、もうすぐお別れとは。

桂花ちゃんと同じタイミングでドリアを平らげ、空いたお皿を片付けてもらおう。彼女が新しい飲み物を入れて戻ってきたタイミングで、私は居住まいを正した。

「約二年、大変お世話になりました」

「こちらこそ、お世話になりました」

私が深々と頭を下げると、彼女も同様に頭を下げてくれた。彼女は頭を上げると、「さよならしても、ズッ友だからね」と言った。

「だから、またみんなで登ろうよ。テッペンまで」

桂花さんは、窓の向こうに見える黒い塔、ハチ公タワーを指差した。テッペンには特別な許可がないと立ち入れないが、彼女はその権限を有している。

みんなで登るためには、もう一度この街へ戻ってこなくては。「街」の調査部に掛け合つて、彼女との指切りを果たせるようにしよう。

「いつになるか分からないから、先輩の世話は頼んだわよ」

「ええ。それは甲斐くんをお願いしてくれない？」

桂花さんは、本気で嫌がる様な素振りを見せた。彼女が嫌がる気持ちも、私にはよく分かる。彼女が言うように、メンズのことはメンズに頼めばいい。

その後も、店員さんに席を開けると頼まれるまで女子トークに花を咲かせ、二人だけの送別会を静かに終えた。二人分の料金を私が支払い、いつまでもその時が来なければいいのと思いつながら、薄暮の中を並んで歩いた。

(完)

初出 令和五年一月一六日 noteにて公開

幕間のメモランダム

令和八年六月一日 初版発行

著者 長谷川 雄治

発行年月日 八年六月一日

発行者 長谷川 雄治

連絡先 hasegawa@kamenwriter.com

X(Twitter) [@kamenwriter01](https://twitter.com/kamenwriter01)

URL <https://www.kamenwriter.com>

© 2026 長谷川 雄治

※引用・私的利用の範囲を超える無断転載・複製・インターネット上への掲載（SNS・ネットオークション・フリマアプリ含む）・AI学習への利用を禁じます。

※表示やファイルの不具合、記載内容に関するお問い合わせがある場合は、上記連絡先までメールでご報告ください。